

されているという。北海道に現存するコナラ林は、ほとんど二次林であり、自然植生としては存在しない。金子のいうコナラ林も多分、二次林であり、構造解析から、将来はエゾイタヤ林に置き換えられていくといっている。当調査地のコナラ群落も、将来カシワやシナノキ、エゾイタヤの森林に変わっていく傾向がみられた。

北海道の低地では、すでに開発や伐採が進み、森林は減少傾向にある。たとえ二次林でも、これらの森林の保全に配慮していくことが望まれる。

参考文献

- 伊藤浩司(編著) 1987: 北海道の植生. 378pp.
北海道大学図書刊行会, 北海道.
加藤亮助 1952: 北海道演習林の森林植生. 東京
大学農学部演習林報告43, 1-18p.
松井健・武内和彦・田村利和 1990: 丘陵地の自然
環境—その特性と保全—. 202pp. 古今書院,

東京.

- 宮脇昭(編著) 1988: 日本植生誌第9巻北海道.
563pp. 至文堂, 東京.
鈴木伸一 1988: 針葉樹・広葉樹混生林; トドマツ
ミズナラ林. 日本植生誌第9巻北海道(宮脇
昭編), 170-176p. 至文堂, 東京.
—— 1988: 夏緑広葉樹二次林. 日本植生誌第9
巻北海道(宮脇昭編), 275-277p. 至文堂,
東京.
武田義明・植村滋・中西哲 1983: 北海道のミズナ
ラ林について. 神戸大学教育学部研究集録71,
105-122.
館脇操 1955: 汎針広混交林帯. 北方林業7(11),
8-11.
遠山三樹夫・持田幸良 1978: 北海道胆振東部の落
葉広葉樹林. 吉岡邦二博士追悼植物生態論集,
134-149p.

〔植物ニュース〕160. ツチアケビ(らん科)

Galeola septentrionalis Reichb. Fil.

ツチアケビは林内などの陰地に生える腐生植物で、県下では上水、佐久、北安、木曽、諏訪、上伊、下伊などで記録されているが、諏訪と佐久は現在未確認であり、長野県植物誌チェックリスト(1988年版)でも木曽と下伊那だけで記録されている比較的分布の少ない種である。

昨年10月下旬、北佐久郡望月町春日蔵平(標高900m)で立科町武捨精一氏が採集し、同氏の案内で、11月2日に現場(雑木林の林下)を確認した。

標本は信大教養部にある。(池田登志男)

〔新刊紹介〕 桜井善雄著「水辺の環境学」222頁、1991年7月刊、1,400円、新日本出版社。

本会会員で、信大繊維学部教授の桜井先生の著である。先生は最近、ほとんどコンクリートで固められてしまった河川や湖沼の岸辺を改修して、なるべく自然らしい水辺、人々が自然に親しめるような水辺とするよう各所で提唱されている。

本書はそのような考えを多くの人に知ってもらうために、雑誌「月刊・水」に、「水の風景」というテーマで毎月連載されてきたものを、編集して出版されたものである。

目次をいくつか拾うと、ヨシ原の生き物、水辺にいのちを、トンボのすむ池、子供の川、改修河川、湖のみずがめ化、地域の水辺、親水公園、近自然工

法、多自然型川づくり、ヤナギの効用、街の川に自然をなど多数の項目がある。

長野県の河川、湖沼の実態ばかりでなく、日本の各地域やヨーロッパの進んだ事例なども多数紹介されている。

最近、日本でも多自然型川づくりなどが取り入れられてきつつあるが、変化に富んだ生物の生息環境という観点からみれば、きわめて不十分であるという。

わが国の水辺環境づくりにおいて、これからいかに必要なことは、生き物の生活にかかわる科学の生態学の視点と、その生き物の環境を実現するための、治水をふくめた土木技術である。またそれを推進するための社会政策であるという。そのために多数の事例を紹介し、また先生が発案された具体的なエコ技術も紹介されている。

一般向けに平易に書かれていて大変分かりやすい内容である。これからの私たちの豊かな生活を実現するためには、豊かな自然を必要とするが、その根拠も具体的に伝えてくれている。

〔新刊紹介〕 加藤秀俊編「日本の環境教育」530頁、1991年11月刊、5,000円。河合出版。清里環境教育フォーラム実行委員会編「日本型環境教育の提案」448頁、1992年7月発刊、2,800円。小学館。

最近、日本環境教育学会も設立されて、環境教育の重要性が認められつつある。前書はその理論、諸外国との比較などを、後書は日本での具体的な環境教育の提案がなされている。